

全国各地の温泉地で昨年発覚した温泉偽装表示の反省を踏まえ、大分県別府市の温泉施設が入浴客の立場に立って温泉の肌触りや臭いなどを記した「温泉カルテ」を全国に先駆けて掲示し始めた。入浴客が知りたい情報をわかりやすく表示する姿勢は、他の温泉地も注目する。カルテの基準を作り上げ、各施設を評価するのが、別府の温泉Gメン。リーダーの齊藤雅樹(38)は、「温泉表示の業界標準にしたい」と信頼回復の先頭に立つ。

別府の温泉Gメン 齊藤 雅樹



徳島県生まれ。1966年東大工学部卒。現在、科学技術振興機構勤務。97年別府市に移住、大分県産業科学技術センターに転職。今年4月、別府八湯温泉保証協会が導入した温泉カルテにユーザー評価をする温泉Gメンのリーダーとなる。

温泉を正す目と舌と鼻

「ほんのりと料理で使うタシの風味がします。硫酸イオンなどの微量な金属成分がパランス良く混ざり合っていて、こんな味になるのです」。別府市山あいの鉄輪(かんなわ)にあるひょうたん温泉。齊藤はプラスチックコップに注いだ温泉を口に含んで飲んだ後、つぶやいた。

ケロリンの風呂おけ、プラスチックのコップ、携帯型パソコン。齊藤のマイカーにはこの三点セットが積んである。風呂おけは、湯が出ていどんな場所でも入浴でき

るように、コップは百度近い源泉の湯を飲むための必需品。チェックした内容は忘れないよう、その場でパソコンのキーボードをたたく。温泉カルテを導入したのは、別府、鉄輪、亀川など八カ所の温泉郷が設立した別府八湯温泉品質保証協会。協会が全国五百カ所以上の温泉に入った経験を持つ人を入浴者として探し、「温泉Gメン」とい

る。温泉カルテには、偽装表示後、環境省の新規則で温泉施設に義務付けられた加水、加温、循環ろ過方式、入浴剤・消毒剤の四種類の有無の表示と共に、別府ではこれ以外に義務付けられていない温泉Gメンがチェックした十三の感覚評価項目が盛り込まれる。つるつる感、泡付き、酸味、苦み、渋み、甘み、硫黄臭、モール・油臭、鉄分の香りな

どをすべて、ゼロから四まで五段階評価する。現在、Gメンがチェック済みの別府の四十施設のうち、二十数カ所がカルテを掲げた。別府は二千八百三十八もの源泉と、日量十三万リットルの湧出量を誇り、いずれも日本一だ。そのうち、ホテルや旅館などの宿泊施設(約三百)、地元住民向けの共同浴場(約百)がGメンの調査対象だ。齊藤は「このうち半分には入った。全国各地の温泉も含めると、九百湯は体験した」と胸を張る。



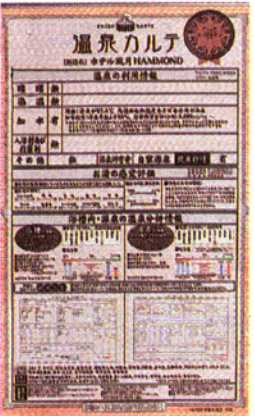
温泉を飲み、においをかいでチェックした内容をパソコンに入力する

信頼回復へカルテ作り

「Gメンのチェックはあくまでほかの温泉と比べての相對評価。好き嫌いは入浴者が判断する。材料の一つになればよい」とサラリと言う。齊藤の原動力は、利用者に本物の温泉を知って欲しいという素朴な思いだ。各地で問題になった温泉偽装表示問題についても、客をあざむいた温泉は言語道断とした上で、「消費者の理論武装も足りなかった」と指摘する。「温まって気持ちよさを味わうのなら、(水道の)沸かし湯で十分。かけながしの天然温泉と書いてあれば無条件で信じてしまっ(客の)姿勢も問題。玉石混交の玉だけをきちんと見分けられるようになければ」と消費者としての意識改革を強く求める。



■熱湯の源泉を特産の竹を使い適温に冷却する装置。ホテルに掲示された温泉カルテ(別府市鉄輪温泉)



別府の温泉は湯量が豊富だが温度が高すぎて水を加えないと入れない。各施設が抱える悩みを解決する切り札が、齊藤らが四月に開発したオリジナルの冷却装置だ。ヒノキの木枠と竹を高さ十

度前後の熱湯をポンプで装置の最上部にくみ上げ、竹を伝ってしたり落とす。その際発生する気化熱で温度を二十五度前後まで下げ、高熱の源泉と混ぜて入浴用として使う。七年前、ひょうたん温泉の社長から「温泉が熱すぎて困っている」という相談を受けた齊藤が日本有数の真竹の生産量を誇る大分県の竹を使った装置のプランを練り、齊藤の職場である大分県産業科学技術センターなどの研究者に呼び掛けて設計した。

ひょうたん温泉はこの冷却装置を使って、七月から念願の二十四時間営業を開始する。現在は午後九時に終了し、翌朝八時まで湯を少量ずつ出しながら、温度を調整しているが、冷却装置でこの手間が不要になる。しかも水道水を加水するのではなく、一〇〇%天然温泉。この装置は実用新案を申請中で、今後外販する考え。福岡県の原鶴温泉のほか、東海地方などからも引き合いがあるという。

した海洋工学の技術を生かし、二〇〇一年には杉の皮を原料にした海面油の吸着マツトを開発。二〇〇四年に発生した広島県の運搬船座礁事故で流失した油を除去する際、マツトは大活躍した。別府周辺の杉を使った。竹を材料にした温泉冷却装置もその延長だ。Gメンと別の顔を持つ研究者、齊藤は「地域の資源である温泉や木材を有効活用して、活性化に貢献したい」と自らに誓う。

感覚評価、全国900湯に入った経験で「湯が熱すぎる」悩み竹の装置で解消

文 山本隆
写真 渡辺信雄